

1

子どもたちに教えられた40年

1979年（昭和54年）東京都立北養護学校（現・東京都立北特別支援学校）で教鞭を執り始めてから、2020年3月に世田谷区立桜丘中学校の校長を退職するまで、約40年間を多くの子どもたちや保護者、教職員、地域のみなさんと過ごしてきました。自分ながら、よくこんなに大勢の人たちと長い間お付き合いができたなと思っています。

というのは、そもそも私は小さい頃から極度な人見知りで、人間関係を作ることが大の苦手だったからです。幼稚園の時に一番好きな女の子に悪口ばかりの手紙を書いてシスターからこっぴどく叱られたり、友達と遊ぶことよりも独りで本を読んだり、工作をしたり機械をいじったりというのが小学校時代の記憶です。

ですから将来は、人間関係に惑わされず一人でも仕事ができる技術者か研究者になろう

1. 子どもたちに教えられた40年

と考えていました。それが、ひょんなことから「学校の先生」になってしまった。ちょうど大学の卒業とオイルショックの時期が重なり、希望していた職種の採用がほとんどなくなってしまったからです。そこで、まあ学校の先生なら、好きな科学や数学の話をすれば授業はなんとかなるだろうし、何しろ長い夏休みもあります。その時だけは一人になって好きなことができるという甘い考えで教員採用試験を受けてみたのです。

当然ですが、対人スキルの欠如している私にとって養護学校の先生の仕事は、そんな甘くありません。特に嫌だったのが人前で歌う



こと。恥ずかしくて絶対できない！ しかも大勢の子どもたちの前で！

はじめは胸の前で腕を組んだまま小さな声で歌うふりをしていました。でも不思議なもので、そんな私でも3ヶ月もすると結構上手にお遊戯付きで歌を歌えるようになってきました。今でも「手のひらを太陽に」を手話付きで歌うことができます。同僚の教員とうまくやっていくのも至難の業です。的確に相槌を打ったり話をうまく切り出せず黙っていることが多い私を見て、大御所さんからは「お高くとまっている」とよく陰口を言われました。

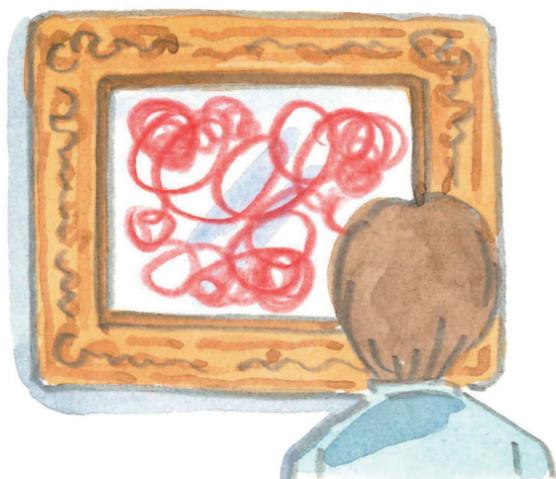
そんな苦労はありましたが、子どもたちとの日々の出会いは、新鮮で毎日が驚きの連続でした。重複した重い障害があるのに、子どもたちはこともなげに「健やか」に成長していくのです。私自身も子どもたちの成長とともに昨日とは違う自分を感じられました。40年間、多くの子どもたちが私を救ってくれました。多くのことを教えてくれました。そんな子どもたちの話をこの本で紹介していこうと思います。

2

15年ぶりの再会とミノルの絵

私が教員生活を始めた都立北養護学校の隣には、当時「療育園」と呼んでいた現在の「東京都立北療育医療センター」がありました。子どもたちのほとんどはスクールバスで登校してくるのですが、自宅からではなくその療育園から直接通ってくる子どもたちもいました。健常者にとっては僅かな距離ですが、車椅子やクラッチを使いながら小児医療棟から学校まで来ることは小学校低学年の子どもたちにとっては結構な距離があります。

基本、自力での登校を目指していましたが、小さな子どもたちが、健気にそれこそ数十センチずつ移動してくるのを見るとつい手を差し伸べてあげたくなります。そうすると怖い先輩の先生から余計なことはいらないようにと目で叱られて手を引っ込めることもよくありました。



そんな子どもたちの中にミノルがいました。給食の時間、子どもたちは不自由ながらもスプーンや滑り止めの付いたお皿で食事を摂るのですが、ミノルは目の前に食事が出されるとムシャムシャと手掴みでご飯を食べだします。先生から「みのちゃん、ちゃんとスプーンで食べてください」と注意され、しぶしぶスプーンを使います。

ミノルは6人兄弟の5番目で、小さい頃から他の兄弟に混じって食べることに必死だったのに違いありません。両親にも知的障害がある、そんな恵まれない家庭環境もあり、3年生の時、女優の宮城まり子さんが創設した肢体不自由児

2. 15年ぶりの再会とミノルの絵

療護施設「ねむの木学園」に引き取られました。

その年、私も大田区の区立中学校へ異動となり、世田谷区で教頭になったのはそれから15年以上後です。そこで教育委員会主催の「ねむの木学園」へ行く研修会があり、宮城さんに会いたいとすぐに申し込みをしました。

当日、学園内にある美術館で、一枚の絵が私の目に留まりました。見覚えがあるぐるぐると単色のクレヨンで描かれた絵。一瞬、口元を歪め自由が利かない手で一生懸命描いている小さいミノルの姿が浮かびました。不思議です。15年も会っていない子の描いた絵がどうしてわかるのでしょうか。「絵を立派な額に入れ飾ってあげれば、子どもたちは素晴らしい絵を描くようになる」宮城まり子さんの起こした奇蹟です。

ミノルは成人療護施設「のどかな家」で、小学生の時と同じように車椅子に乗っていました。成人して体は大きくなり顔にはうっすらと髭も見えます。遠くから「ミノル」と呼んでみました。もう一度。でも、ミノルはちょっと私の方を見ましたが、すぐに違う方へ顔を向けてしまいました。

叱られ続けてきた ミサヨ①

東京都立北養護学校（現・都立北特別支援学校）から大田区の中学に異動したのは、ちょうど校内暴力が全国的に吹き荒れていた頃で、赴任した学校も例に漏れずそうとう荒れていました。生徒から怪我をさせられて病院へ行くかもしれないと、いつも新しい下着をつけて行く、そんな学校です。

ある時、ミサヨという生徒を3学年の自分のクラスに入れました。ミサヨは、家出・深夜徘徊・喫煙・カツアゲ（恐喝して金品を巻き上げること）・不純異性行為・対教師暴力など手のつけられないような子でしたが、なぜか気になり面倒を見たくなくなったのです。

僕のクラスになってからも、ミサヨはありとあらゆる「悪いこと」を仕出かしました。後で「先生には言えないような悪いことをいっぱいした」と言っていたので僕の想像も及

3. 叱られ続けてきた ミサヨ①

ばないこともしていたのでしよう。まだ若く
て体力のあった僕は、家出をしていなくなっ
たミサヨを探して羽田の海や蒲田の街を深夜
まで探し回ったものです。

ミサヨは入り組んだ路地を十分ほど歩いた
先の古い都営住宅に住んでいました。仕事が
早めに終わった時は、と言ってもとうに9時
は過ぎているのですが、よく家庭訪問に行き
ました。家庭での様子や交友関係を母親から
聞くのですが、毎回愚痴の連続です。小学校
でも「きたない」とか「どうしようもない子」
と言われて続けてきた子だと6年の時の担任
から聞いていましたが、家庭でもミサヨは小



さい頃からずっと母親の小言を聞いて育ったのだろうかと思いました。

叱られ続けてきたミサヨを絶対に責めるのはやめよう、代わりにいっぱいやさしくしてあげようと決めました。ミサヨが悪いことをしたら僕が代わりに謝ればいい。職員会議では、本当に毎日謝ってばかりいました。塀にスプレーで落書きをしたといえれば一緒に行き頭を下げました。小学生からお金を巻き上げたと言えば、警察で相手の保護者に頭を下げました。でも、一度もミサヨを叱ったことはありません。もう十分にミサヨは叱られてきました。もういいでしょう。

そんな毎日でしたが、やっと一年が過ぎ、目標としていた卒業式まであと数日のことでした。もう吸わないと約束していたミサヨが、またシンナーを吸ってしまいました。1回目は大目に見てもらいましたが、2回目は警察に連絡すると決めていました。少年鑑別所にも入っていたことがあるミサヨはすぐに少年院行きが決まりました。もう卒業式でミサヨの名前を呼ぶこともできなくなりました。

春休みのことです。今年で定年を迎える養護の先生から「ミサヨが保健室に来た時、『こ

3. 叱られ続けてきた ミサヨ①

んな油虫みたいな髪の毛』と鏡を見ていたので、『そんなことないよ。きれいな髪だよ』
と言ってあげたのが最後になったね。悪い子だったけどやっぱり子どもだから、わからな
いんだね。西郷先生のお嫁さんになりたいとか言っていた。中卒で学校の先生となんか結
婚できるはずがないのにな」と話してくれました。

それを聞いて、なぜだか止めどもなく涙が出てきて困りました。